

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(16)〉

TURKISH DELIGHT (2)

—トルコ視察・場面編—

菊地知子

ある日常の光景・日本にて

—「お約束」は誰のものか

昼下がりの、すいた電車で揺られる。斜め前に、早めに仕事を終え子どもをピックアップした帰り道だろうか、カチツとした黒のスーツに黒靴、ひざには二歳前半と思しき男の子を抱いた女性が座っていた。その小さな男の子は、白い小さなラムネの粒を母親に手ずからもらい、口に含んではちよつと恍惚

としてうつらうつらし、溶け終わるや覚醒して「もつとちゅ(もうひとつ)」と小さな手のひらを母親に差し出す。母親は容器から出した一粒を、男の子の指につまませる。男の子はまた幸せそうに口に入れる。

何度目の「もつとちゅ」であったか、私には定かでない。しかしそれはおそらく九度目のそれであったのだろう。「今のもうおしまいよ。お、し、ま、い。十個のお約束だったでしょ。もうおしまい

です。お、や、く、そ、く。男の子につられてうっかりうつらうつらしそうになっていた私は、その言葉と、それに続く男の子の泣きぐずる声によって、しゃっきりと覚醒した。ラムネの容器はカラになるのを待たぬまま、上等そうなかばんにしまわれた。

約束なるものは、互いの思いに同じ有意さで交わされるものであると思っていた。しかしどうやら「命令です」とか「決まりです」と言うことはややばかられるためか、代わりに「お約束」と呼ばれることがあることを、私たちは社会生活の中で多々経験している。「もつとちゅ〜」と泣きながら、母の胸で眠りについたその男の子が不幸であるかといえば、決してそんなことはないだろう。それでも私には、お約束という名の規制の存在そのものが、少なくとも教育とか子育てとか呼ばれる営みにおいては、あまり幸せな感じがしないなと思えてしまう。

トルコの地方小都市での光景

— キツネは何との約束に生きているか

中部アナトリア地方の大地で、高みから、起伏の大きい岩場を走るキツネを見た。キツネは素早く走り、岩穴へ入っていった。そして、そのすぐ後には、地に近く低く茂るブドウの木を見た。私は、先のキツネが、野生に生きることを許されたキツネ、自分を生かす大地との約束に生きるキツネであることを確信した。

イスタンブールでの、子育て中の父親への聞き取りによると、トルコの人々は、ブドウを高濃度に煮詰めたエキスを、滋養強壮のため大人も子どもも薬のように食するのだそうだ。あらゆる動植物の活動の源たるブドウ糖の名は、当然ブドウに由来し、熟したブドウの実には多量のブドウ糖が含まれる。人に限らず動植物が、その生命保持に多いに役立つブド

白糖を効率よくブドウから取る知恵を古くからもっていたことは想像に難くない。そしてまた、聖書にあるがごとく、ブドウの木の一枝一枝が、さらには実の一粒一粒が、大地（あるいは偉いなるもの）とのつながりにおいて自らが生かされていることを知る、そのブドウである。

さらに余談めくが、小アジアと呼ばれる現在のトルコの地に、紀元前に生まれたであろうイソップの寓話の中に「キツネとブドウ」の話がある。柵のブドウが取れずに「あれはすっぱくてとても食べられないものではない」とキツネが負け惜しみを言うという、あの話である。強がりを言うキツネの姿はそもそも哀しい。それをさらに「いいざまだ」とあざけるためだけに、人の叡智が紀元前からこの話を語り継いできたとは思えない。他者の悲しみを自らも引き受けつつ昇華していくような精神の働きに、人間の人間らしさがあると、地に近く生える、限りなく

野生種に近いであろうブドウの木を見て、私は改めて思う。キツネには、ブドウ柵に作られたブドウは取ることができない。農耕や牧畜という、人間による約束事に成り立つ社会からは締め出され、入り込めば悪者になる。しかも、もはや野生にのみ生きることはできないキツネの哀しみ、ブドウ柵にブドウをこしらえる人間との約束にもまた生きられないキツネの生まれいづる悲しみを、この寓話もまた、示しているのではないか。

いずれにしても、岩場の大地で目にしたキツネは、自分を生かす、自分が生きることが許された大地、あるいは自然との約束に生きていて、そう私には思えたのだった。

再び日常の光景・イスタンブールにて

—子どもは何との約束に生き得るか

イスタンブールの中心にある公園でのこと。これ

でもかこれでもかとはばかりに、目前に姿を現す子どもの数の多さと、繰り広がる光景の興味深さとに、同僚と私とは、もはや集中力が持続せずぼんやりとベンチに並んで座っていた。

そんな私たちのすぐ近くでは、三歳くらいの男の子が、植え込みの葉っぱやすれ違った人に気を取られて振り返ったり立ち止まったりしながら、家族が歩く後ろを、おそらくは帰り道の方向に歩いていた。その子が、すぐ前を歩いているはずの母親を確認しようと視線を移動したそのとき、二人の異邦人が自分のほぼ真横で、自分のことを疲れたまなざしで見ているのが目に入ってしまった。男の子の真ん丸な目と、目を合わせてしまった私たちは、同じく目を真ん丸にして息を飲んだ。母親は、自分の思いよりも少しばかり遠い所を歩いている。赤ん坊を抱いた父親や連れの大人们は、それよりさらに先にいる。

「約束が違うじゃないか」との思いで彼は嘆きたいのだった。彼にとつての約束とは即ち、近しい他者への全幅の信頼、大切にされているというわが身への自信、などと私たちが呼ぶ類のものである。私たちの視線を確認したことが、「約束が違う」という彼の思いに追い打ちをかけたことも、ほぼ間違いないだろう。隣で息を飲んだままでいる同僚が、「(お母さんまでの、男の子からの距離が)ちよーっと遠かったよねえ。あたしたちは近過ぎたし」と、かなり同情的に、残念そうに私にささやく。

男の子は、これ以上の落胆の表現はない、と思えるほどに、がくん、と首をまっすぐ下にうなだれて見せた。ややあつてスイツと顔を上げ、母親を呼び、今一度私たちを確認し、また見事なほどの落ち込みようで、ガクン、と頭を垂れる。しばしの静止。そしてもう一度顔を上げる。母親は、思いの外離れた所にいたわが子に(といつてもせいぜい十

メートル足らずであるが) 少しでも近づき、声をかける。まだ納得がいかない。何も言わないが、「だって約束が違っちゃったんだよ、おかあさん」という声が聞こえてくる気さえする。もう数歩、母親は男の子に近づいた。男の子はガシツと母親の太ももをつかまえ、頭やら肩やら腕やらをヨシヨシとさすられ、でれでれに甘えている。多くのトルコ女性の常で、スカーフを顔に巻いたその母親は、慈愛に満ちた深い瞳を笑った形にし、案外力のある腕の片方でひよいとその子を抱き上げて、スタスタと、淡々と、家族の待つ方へと歩いていった。互いに同じ有意さで約束は成り立ったらしい。

文脈を違えずに

異文化たる他者を見るとということ

— 私たちは誠実にトルコに学べるか

トルコの人は、問えば皆、「自分は子どもが好き

だ」と言う。年配者や子どもにいる人は言うに及ばず、十九歳の携帯ショップの店員が、また、社会学を学ぶ三十過ぎの青年が、祖母の故郷を訪ねて旅をする二十歳前後の若く美しい三姉妹が、聞けば例外なく目を細め、「自分は子どもが大好きだし、トルコ人は皆子どもが大好きだ」と言う。「好きか」と問われて否定形で答える、ということも、あるいはトルコの人は考えないだけのことなのかもしれない。それにしても、彼らは概して、人を馬鹿にしない人たちだ、と思う。朴訥であるとか純朴であるとか、そういう言葉もあるいは彼らの人柄を言い得ているかもしれない。子どもとの関係もしかり。侮つ



たり、見くびったりはしないし、共感の示し方はさりげなく淡々としていて、決して大仰ではない。

トルコの料理は、ところで、種類の多さも質も、実に豊かだ。菓子の類もまたしかりである。現地ではロクムと呼ばれる Turkish delight。残念ながら私たちは、トルコ滞在中に食べることはおろか、その後イギリスのキオスクで見かけるまで、その存在を認識することさえもしなかった。イギリスで立ち読みしたレシピ本によれば、材料はコーンスターチ、大量の砂糖、レモン汁、バラ水など。材料と作り方から察するに、日本の求肥や直方形のゼリーなどのような、クニユクニユした食感の甘いお菓子であると思われる。十三世紀ごろからあるといい、それがあるときイギリス人がおいしさに驚いて持ち帰り、その名をつけたということだ。英国の名高い児童文学に描かれた、少年が魅了され餓鬼さながらに食べるさまは、この菓子や菓子を生んだ国の他国との歴

史も含め、その実態の隠喩足り得るだろう。

野生のキツネには到底かなわないが、人の子が、何がしかの枠組みとの約束よりも人そのものの約束に生きることが、まだ緩やかに許されている。その姿は、覚えのない畏れを、なるほど私たちに抱かせ得る。素材の良さが生き、奇をてらわずシンプルで、確かにおいしいであろうその菓子はまた、魅惑的で食べたら虜にされてしまうような、言うに言われぬ魔性をも感じさせるに充分であるかもしれない。

しかし、と私は思う。私たちが異文化としての他者に触れるとき、それを大切に引き取り考える誠実さこそが、互いを生かす、それゆえに果たすべき「約束」としてあるのではないかと。異質でありながら非常に深く共感も覚えるトルコの、子どもを取り巻く社会のありように触れ、そんなことを考えたのだった。

(お茶の水女子大学)